第 32 回　再考・まぼろしの松江城博覧会

第 23 回のこの欄に掲載した同名の記事について、お詫びとともに訂正をさせていただきます。そこでは、明治 6 年に松江の豪商たちによって松江城の天守や本丸、二之丸を会場とした博覧会が企画されたこと、島根県の承認のもとに綿密な計画がたてられて出品が呼びかけられたことなどを紹介しました。しかながら、反響を呼んだ一大イベントであったはずなのに、実際に開催されたことを伝える史料が見あたらないところから、「まぼろしの松江城博覧会」として報告した次第です。

ところがその後、史料編纂室が行った古文書の調査によって、「出雲松江博覧会物品目録」が発見されました。この目録は、29cm×43cm 程度の薄手の紙に印刷され、 第一号より第七号からなっています。 それぞれに「出品ノ順序ヲ以テ録ス」として品名が記載され、その末尾に出品者(所蔵・保管者) が記されています。

例えば、目録第一号の冒頭には「測量器・秤量器・(中略)・双眼鏡・望遠鏡・(中略)・図引器械・万国図(以下略)」等が列記されており、「右　島根県　官庫所納」とあります。したがって、県は単にこの企画を承認しただけでなく、積極的に後援したことがうかがえます。また、同年五月に出雲大社博覧会を開催したばかりの千家・北島両家からも出品されています。

「出雲松江博覧会物品目録　第一号」(個人蔵)

出品者には「マツエ竹内平六」、あるいは「西京駒井宇八郎」・「伯州松本万年」のようにその居住地が記されていますから、出雲国全域のみならず周辺各地からも出品されたことがわかります。なお竹内平六の出品物は「松江城天守閣雛形」です。現在天守二階に展示されているあの天守模型のことでしょう。

目録には、「右　松江御城内所納」の「古草履」の場合だと、「前出雲国主堀尾吉晴、松江城築城成始メテ登閣ノトキ所用ト云」とか、「ユカタ　丈ケ四尺九寸　行キ四尺五寸　釈迦ヶ嶽所用」いった注記がつけられているものもあり、内容や来歴を知ることもできます。なかには「八岐蛇頭骨」のように、首をかしげるような出品物も記載されています。

したがって、今のところこの「出雲松江博覧会物品目録」の他には傍証として提示できる史料がありませんが、松江城博覧会は実施されたとみてよかろうと思います。つまり、「まぼろし」ではなかったのです。新史料の発見によって歴史像が書き換えられることは歴史研究の常なのですが、コラムに掲載する前に関連史料をさらに博捜することをしなかったために、不確かな情報を提供してしまったことをお詫び申し上げます。

ところで、本当に「まぼろし」となってしまった博覧会があります。松江城山公園を会場とする「神国大博覧会」がそれです。以下、主として「山陰新聞」の関係記事によってその経緯をたどってみることにします。

まず、開催趣意書(「松江市公報」昭和 11 年 7 月 25 日付・号外)によると、「挙県一致の支援の下に此の神国出雲の地に於て、昭和十三年陽春の候市制施行五十周年及陰陽連絡鉄道全通を記念し『神国大博覧会』を凝然と聳ゆる国宝松江城天守閣下に開催して遠く堀尾氏三百年の昔を偲び、国防に関する研究並に施設物を首め普く内外の物産及観光施設を聚蒐陳列し採長、補短彼此考覈以て斯業振興の機運を新たにし文化を開発し国運の興隆に資すると共に神国出雲を始め、島根県を天下に紹介し、以て真の国防と雄偉なる国勢の進展を期せむとす」とあります。つまり、「神国大博覧会」は松江市が主催して「内外ノ物産及ビ国防、教育、国勢、観光、文化資料等ヲ展示シ国運ノ隆昌産業ノ振興文化ノ発達ニ資シ併セテ神国島根ヲ紹介スルヲ以テ目的ト」(「神国大博覧会規則」第二条)し、「昭和十三年四月五日ヨリ五月二十九日迄五十五日間」(「同」第三条)開催する予定だったのです。

すでにこれ以前、松江市には、32万円の予算で2万坪の敷地に松江市産業観光博覧会を開催する構想がありました。(「山陰新聞」昭和 11 年 2 月 26 日)松江市の産業調査会でも、「神国を紹介する絶好の機会」として博覧会の開催を市長に建議したり、松江商店連盟では、岐阜・名古屋・四日市・姫路・神戸・津山にそれぞれの博覧会場と商店街の視察団を派遣していました。(「同」同年 4 月 26 日)

ただ博覧会の名称については、「神国出雲」・「神国日本」などもあって、三案を折衷して「神国大博覧会」と決定されたのは 7 月 13 日の市議会でのことでした。(「同」同年 7 月 8 日)

十三年春の開催が決定されると、松江市では、全国各府県知事・各市長・商工会議所会頭等に挨拶状を出すとともに、朝鮮・台湾・樺太・南洋その他植民地長官と満州国総裁に対しては特設館の依頼状を出しています。また、「神国博」の特色を明確にするため神社仏閣に挨拶状を出したり、「神国博」のポスターを懸賞募集したりしています。(「同」同年 7 月 22 日)

一方、市民の間からは、松江駅から白潟埋め立て地に向かう「大博覧会通り」の拡幅や側溝(下水)の整備、また末次埋め立て地を遊園地とし観光ホテルを建設せよという声も上げられたようです。(「同」同年 7 月 19 日・27 日)「神国博」を契機として、いわゆる都市基盤の整備が図られたのでしょう。

翌年 5 月になると、「神国博」の全体計画が鳥瞰図とともに発表されました。(「同」昭和 12 年 5 月 2 日)それは 39 cm×54cmの表裏に全体計画と鳥瞰図が印刷されたものでした。第一会場が城山公園一帯、第二会場を白潟埋

め立て地とし、次のようなテーマ館を二つの会場に配置する計画です。なお、総経費は50万円、観覧(入場)料は大人35銭とされています。

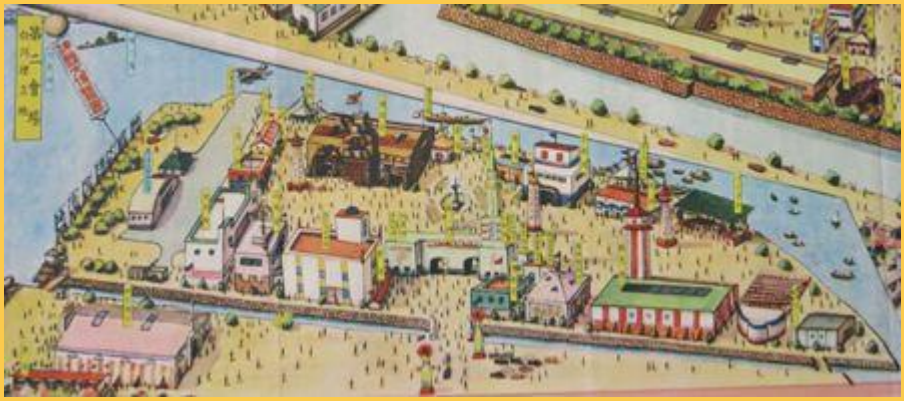
第一会場 城山公園(「神国大博覧会鳥瞰図」・個人蔵)

第一会場

産業本館 島根県館 農林水産館 神国館 教育体育館 宗教館 満州館 朝鮮館台湾館 煙草専売館 園芸館 野外演舞場 子供の国 迎賓館 神代舞楽館 海士(女)館

第二会場

国防館 観光館 逓信ラヂオ館 野外演舞場 特設館(発明品実演館・水族館・京都館・奈良館など) 遊覧飛行場 遊船場 場外余興場



第二会場 白潟埋立地(「神国大博覧会鳥瞰図」・個人蔵)

これをうけて島根県も「神国博」の宣伝隊を編成し、二手に分かれて隣県に出向きPRに努めていますし、会場の建物は 10 月頃から着工と報じられています。(「同」同年 7 月 2 日)

神国大博覧会絵はがき（個人蔵）

ところが、7 月 7 日には北京郊外の蘆溝橋において日中両国軍が衝突し、日中戦争に突入してしまいました。戦線は華北の各地に拡大したので開催を危ぶむ声もあったようですが、8 月初旬の時点では「国防の一推進力たらしめる見地から予定通り開催することと決し、非常時に鑑みて国防色濃厚な神国博」を目指すとし、宣伝のために市内各所にネオン塔を建設することとなりました。（「同」同年 8 月 8 日）

しかし 8 月末になると、開催準備にあたっていた産業課長は、「静観主義のもとに準備だけは進める」という趣旨の発言をしています。これは、昭和 13 年度に開催を予定している京都・新潟・仙台・甲府の各地が、日中戦争(当時は支那事変とよぶ)の影響をどのように受け止めているかを情報収集したところによるものです。（「同」同年 8 月 31 日）

9 月下旬には、市長が県知事や会議所会頭と懇談してそれぞれの意向を打診しています。その結果「時局に鑑みて中止」し、付帯事業としてすでに着工している城山公園の整備などの土木事業だけは継続するという方針が決定されました。（「同」同年 9 月 25 日）

ところが、東京から帰った市議会議長は「一年延期で差し支えなかろう」との発言をしています。（「同」同年 9 月 27 日)この影響が大きかったのか、10 月 2 日に松江市は「将来可及的適切なる時期を選び開催を約」すとする神国博延期の声明を出しました。（「同」同年 10 月 3 日)「神国博」は中止ではなく延期とされたのです。そして、11 月 10 日の協議会において、議員全員が昭和 14 年 4 月 5 日からの「神国博」開催を決議したのでした。（「同」同年 11 月 12 日）

松江市に続いて仙台市も1年延期を発表し、昭和 13 年度に開催を予定した各市とも 14 年に延期する意向で、山形県鶴岡市のような新顔も名乗りをあげたと「山陰新聞」は報じています。これは、14 年には戦争も終了しているだろうから戦勝祝賀の意味をこめての開催で、「全国、博覧会の洪水」のなかで松江市はいかに他都市をリードするかが今後の課題とも報じています。(「同」同年 10 月 31 日)

ところが、近衛文麿内閣は、翌 13 年の 1 月 16 日にいわゆる「国民政府を相手とせず」声明を出して、みずから停戦の手がかりを放棄してしまいました。「神国博」の当初の開催予定日直前の 4 月 1 には、国家総動員法が公布されて、戦争の遂行に国家国民の全力を傾注できるよう、政府によって人的物的資源が統制運用できることになりました。

「神国博」の一カ年延期を決定した松江市では、来場者 50 万人を目標としてふたたび大規模な宣伝を開始する計画をたて、年度初めの 4 月 5 日に事業全体を協議する最初の評議委員会を開催してています。(「同」同年 3 月 15 日・29 日)一面に「時局色を盛り込んだ　神国博覧会全貌　両会場の施設を一瞥」とする記事を載せた「山陰新聞」(同年 6 月 20 日) によると、産業本館が産業報国館へ、国防館が戦捷館へ、観光館が観光報国館と変わったほか、日の丸館や国産館、事変戦利品館・事変記念館・戦利品野外展、戦捷記念塔やトーチカ模型などが加えられています。

ところが、開催のために必要な資材が調達できなくなるのではという懸念が大きくなりました。特に、市当局には、綿製品統制令が発令されたことによって博覧会建物の装飾に必要とされる主要な材料が調達できるかという心配がふくらんだようです。(「同」同年 7 月 4 日」)そして、7 月 14 日の評議員会で「時局関係上萬やむなし」として「神国博」は中止と決定されたのです。(「同」同年 7 月 15 日)

「待望の神国博　非常時潮に押流さる　三年間の苦心力闘も国策の前に姿を消す」と報じた紙面の隣には、「片野部隊　原隊へ遺骨凱旋」として、白布に包まれた戦死者の遺骨を抱いた隊列の写真が掲載されています。(「同」同年 7 月 13 日)片野部隊とは片野定見大佐を連隊長とする浜田歩兵 21 連隊のことです。日中戦争が泥沼化するなかで、「神国博」はまさに「まぼろし」となってしまったのでした。

(山根正明)